

題 言

服部鹿次郎博士の薨去

九州帝國大學名譽教授工學博士服部鹿次郎先生十一月七日病ひを以て福岡市の自邸に薨去さる。國家の爲にも學界の爲にも斯る先輩を續々失ふ事は實に惜むべき事である。

特に記者は奇縁を以て服部博士と知り、然も二十年來僅かに數回の面識しかないのであるが、多年の知己も及ばぬ世話になつた。或時は友人の爲に、或時は著述の爲に、斯くて先生は一個無名の青年の爲に一方ならぬ盡力をして下さつた。

土木雜誌として『工學』が初めて發刊された時、自分が曾て計劃してゐた通りの物が出來た喜びに満ちて、『工學』の主宰者であつた笠井博士を訪ねたのも服部先生の紹介であつた。

大正十三年我等工事畫報の創刊に際しては服部博士の示教を得た處甚だ多い。然も博士の満足せらるゝ丈の内容編輯には到底達する事が出來ないで、今日も尙ほ我等は此が爲に悩んでゐるのである。

我々は博士の冥福を祈ると同時に博士等が寄託された、我等の責任の重大なるを益々痛感するものである。

淺野總一郎翁翁逝く

健康と精力絶倫を誇つた日本の事業王淺野總一郎氏も遂に八十三歳を以て天壽を終つた。昭和五年十一月七日午後零時すぎ、かくて芝區田町の紫雲閣は忽然として愁雲にとざされたのである。

淺野翁は開國文化の新事業に終始した開拓的事业家であつた。總て當代の事業家なるものは土木事業には最も深い關係を有してゐるが、特に淺野翁は土木的に最も成效した事業家である。

セメント王と稱される一方には埋立港灣事業あり、水力電氣事業あり、其他造船、製鐵、炭礦、電機等に關し何れも土木的に出發した事業が多い。此等の大事業に對し翁は尙ほ満足する處なく、老來の霸氣は日本の救世的大事業を企圖してゐたらしい。經濟國難の際に翁の逝去を見たるは國家の一大不幸であると同時に、我が工事界の爲めにも残念至極の事である。

鐵道省川崎發電所の工事

水力否か火力是か、經濟界の不況につれて建設費その他の關係から、此の問題が電氣界に漸く唱導されやうとしてゐる折柄、鐵道省の川崎汽力發電所は、愈々本年末を以て最大出力120,000 K.W. と云ふ發電を開始することになつた。此發電所は、將來に於ては問題の同省信濃川水力發電所の補助發電所としての役目を擔つてゐるものであるが、工費と工期の關係上、水力に先じて建設せられたもので、K.W. 當り 214圓と云ふ建設費は、此の他の火力發電所等に比べて決して廉いものではないが、その設備の整つてゐる點では正に模範とするに足るものである。殊に所謂東京灣埋立地の運河を利用した、獨特の石炭陸揚設備は就て見る可きもの必ずしも少しとしないであらう。

火力發電所の運命は、その原動力たる燃料を如何にして最低價格にて得るかと云ふ點に於て決せられる、川崎發電所は此點に於て先づ最も好い Condition と設備を持つたものと云ふことが出來やう。